高尾山報 令和2年11月号 毎月1回発行 通巻第682号

高尾山報

令和2年11月号

秋霧を生む 柴燈（さいとう）の 大護摩火

法の水茎（101）

大正大学講師　髙橋秀城

春はただ
花のひとへに
咲くばかり
もののあはれは
秋ぞまされる
（『拾遺集』
よみ人しらず）

（春は花がひたすら咲くだけだ。心にしみる趣は秋のほうがすぐれているよ）

春は色とりどりの草花が咲き誇っていた山野も、今は赤や黄色に色づいています。秋風に誘われて山に分け入れば、いつしか私たちの心も身体も「紅葉の衣」を纏っているでしょうか。

冒頭の和歌に見られる「もののあわれ」とは、自然のありのままの姿に触れたときに起こる感動です。とりわけ秋は「悲秋」という言葉があるように、人間にはどうすることもできない自然の推移に物悲しさを覚える折節でもあります。くるくると翻りつつ舞い散る木の葉に、秋から冬へと足早に向かう時の移ろいを実感します。

踏み分けて
更にやとはむ
もみぢ葉の
ふり隠してし
道と見ながら
（『古今集』
よみ人しらず）

（あでやかな紅葉の道を踏み分けて、わざわざお訪ねしましょうか。落葉して目立たぬように隠している道だと思いながらも）

散り敷いた紅葉は、まるで錦の絨毯のように光り輝いていたでしょう。いつもは往来のある道にも、すっかり落ち葉が覆い被さっています。人目につかない晩秋の庵で、主は、どのような「もののあわれ」を感じているのでしょうか。

「山里の道」と聞くと、仏道修行のために山里の寺などに入る「仏の道」（仏道）も思い起こされます。

「仏の道」は「法の道」とも言われるもので、始めは紅葉に隠れた道のように朧気ですが、「仏様が説いた教え」を一歩一歩踏み分け登ることにより開けてくる「悟りに至る修行の道」でもあります。

庵の主は、敢えて憂き世から離れ、山深い自然の中に身を置いていたのかもしれません。「山林斗藪」（山野に生活し、不自由に堪え忍びながら仏道修行に励むこと）という仏教語もありますが、心を研ぎ澄ませた「仏の道」を一人歩んでいたことも想像されます。

では「仏の道」とは、具体的にどのような道なのでしょうか。そのことを教えてくれるお話として次のようなものがあります。

昔、迦夷羅国（現在のネパールの一部）に長者がいました。夫婦とも年老いて、日が見えなくなっていました。

夫婦には、施无という一人息子がいました。いつも善行を心がけ、真心を持って両親を世話していました。

夫婦は、日頃から深山に入って「仏の道」を行いたいという願いを持っていましたが、息子を置いて別れるのを悲しく思い、それを実行することもなく空しく年月を送っていました。

ある時、施无は父母に語りかけます。「どうして私を気遣うのですか。この世は無常（この世の全ては移り変わること）で、人の命もとどまりません。私も一緒に参りま

秋には山野も赤や黄色に色付く

折り折りの記（135）

山茶花や高尾山麓蕎麦の茶屋

波多野　重雄

高尾山の紅葉は有名である。紅葉が散ると冬枯れの風情となる。咲く花は枇杷、八つ手等地味な花ばかりの中で、華やかな色彩を放つのは高尾山麓の山茶花である。

白色か淡紅色の一重咲きが多い。冬の花らしく散りやすい。椿のように一輪ごとに落ちるのではなく花弁が散り落ち、風もないのにはらはらと舞う。

山茶花の咲く頃は日が短い。椿に似るも椿より淋しい。晩秋から冬にかけてほろほろ散り初めて咲くのに気付く。四国・九州に野生が多く、垣根に植えられ、別名「茶梅」と言う。また新蕎麦の茶屋も賑わう。

（高尾山健康登山の会会長）

早冬路上

厚木市　荒井　一雄

新雨路灯照紅葉
静夜独歩濡舗道
疑是紅花繚乱舞
軽酔薄醒樹香好

春に咲く
きよき白花ハナミズキ
秋に紅葉落とさずたもて

初冬の路上

新雨（雨上がり）に街灯は
紅葉を更に赤くライトアップす…
静かなる夜、独り歩く、
濡れたる舗道を…
疑ふらくは是れ種々の赤き花々の
咲き乱れ舞ふが如し…
半ば酔ひ半ば醒めたる我には
濡れたる樹の香りは好ましき限り…

すので、どうか仏道修行の志を遂げてください」と。

その言葉に父母は喜び、すぐさま山奥に入り草庵（粗末な家）を結びました。そして、滝の水を汲み、山の木の実を求める生活を始めたのでした。

施无は、朝には木の実を取って親に与え、夜には必ず三度起きて親の無事を確認しました。たった一人で何年も父母を養う施无の深い慈しみの心には、慣れ親しんでいた鳥獣たちも感動の涙を流すほどでした。

（『三宝絵』上）

ここに登場する息子の施无とは、お釈迦様の前世のお姿です。両親の「仏の道」を扶けるために、施无は来る日も来る日も献身的に尽くしました。それは決して貧しい生活ではなく、温かくも心豊かな日々だったでしょう。

見返りを求めない施无の「孝養の道」は、いつしか慈しみの心（楽しみを与える情け深い心）を育むという「仏の道」とつながっていました。積み重ねる施の行いが、親の恩と結ばれて、未来の仏と成る種（要因）となっていたのです。

釈尊の昔の行ひ
尊きかな、
悲しきかな。

（『三宝絵』上）

（お釈迦様の前世での施行（施しの行）が身にしみて、ありがたいことよ、胸を打たれることよ）

「道」は「未知」にも通じます。紅葉狩りに出かけるように、まだ見ぬ幸せを求めて、自分の心の奥にも分け入ってみてはいかがでしょうか。繰り返し道を尋ねれば、今までは知らなかった一本の「安心の道」（不動の道）が、きっと見えてくるはずです。

（栃木北部教区普濟寺）

中興俊源大徳忌法要厳修

十月四日（日）

高尾山秋季大祭奉修

十月十七日

十月十七日、高尾山秋季大祭が行われ、高尾山慶賛会の皆様や八王子芸妓衆が参加され、菅谷執事長御導師のもと大本堂において、新型コロナウイルス感染症の早期終息や疫病退散、諸願成就を祈る特別大護摩供が厳修されました。

本年は感染症対策のため、新しい生活様式に即した内容で鼓笛隊の子供たちが演奏と共に歩く練行が予定されておりましたが、残念ながら雨天のため中止と致しました。

来年の秋季大祭では、稚児姿の子供たちの元気な声と、鼓笛隊による賑やかな演奏が、初秋の高尾山を彩ることを願っております。

有喜苑で厳修された柴燈大護摩供

熱祷する菅谷執事長

慶賛会の皆様と八王子芸妓衆の方々の記念撮影

第四十五回　高尾山慶賛会 通常総会開催

去る十月五日、第四十五回高尾山慶賛会通常総会が八王子エルシィにて開催され、約七十名の方々に御参加頂きました。

総会は慶賛会々長である、大野彰氏の挨拶により開会し、議長の選出、令和元年度の事業報告及び会計報告、監査報告、令和二年度の事業計画案及び予算案の順で議事が進められました。

続いて高尾山協賛各団体に、高尾山及び高尾山慶賛会より賛助金が贈呈され、菅谷執事長より謝辞が述べられました。

総会後には八王子市都市戦略部日本遺産推進担当課長である、平塚裕之さんによる記念講演、「日本遺産と未来づくり」が行われ、東京都内で初めて八王子市が日本遺産に指定された経緯や、日本遺産を活用した街づくりの今後のあり方についてお話されました。

謝辞を述べる菅谷執事長

平塚裕之さんによる記念講演「日本遺産と未来づくり」

慶賛会　入会のすすめ

もともと仏教語で「慶賛」とは、仏教寺院、堂塔などの新築、修繕を祝賀する意味でありますが、**高尾山慶賛会**は、高尾山古来から伝承された年中行事を賛助し、御本尊・飯縄大権現様を尊信し、地域社会の親睦を図ることを目的としております。

高尾山は現在ミシュラン三ツ星を頂き、**『心のふるさと祈りのお山、世界に冠たる高尾の自然』**と称せられ、多くの参拝者が来られています。

ぜひとも茲に広く高尾山慶賛会員を募り、ご加入ご協賛を頂き、ご本尊様の威神力に浴されますよう祈念するものであります。

年会費　一口五千円

詳細は高尾山慶賛会事務局にご連絡下さい。

○四二二六六一-一一一五

侍衣装を着た慶賛会の皆様

観音菩薩の宗教 ㉟

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

二十一ターラー菩薩を讃える経典（その10）

今回は前回延べた『二十一ターラーへの讃（以下『讃』）』の第二十一詩句に対する解説の続きである。この詩句が本讃の最後になる。読者の方々には退屈な訳注研究であったと心苦しく思っていたが、本邦初訳の経典を示すことができたものとしてお許し願いたい。

承前。（解説）前回触れたヴェーターラを再論しつつ、死や死体に対する人々の恐怖とその救いを考えてみたい。

死体が人の眼に触れぬようになった現代日本では、死体に対する恐怖は前近代の人々にくらべて薄れている。さらに科学的知識や合理主義にくわえ、夜の明るさは死霊などの魑魅魍魎の現れる余地をなくしつつある。しかし近代以前は、死体や死体置き場、火葬場などは恐怖や禁忌、畏怖の対象であった。古代日本の烏辺野や六原（六波羅）などは死体の火葬場・埋葬地として、都の人々とは隔絶された場所にあった（金岡秀郎「地蔵尊の宗教⑧」高尾山報六四一号）。古代インドやチベット・モンゴルで信仰された火葬場で踊る男女の骸骨の神チティパティ（Citipati）も、日常とは異なる空間への恐怖心が背後にあることは否定できない。

こうした根源的な死や死体にまつわる恐怖が産んだ鬼神の典型が、『讃』の最後に現れたヴェーターラである。ヴェーターラは死体に取り憑いて死体を操り、生きているものに災いをもたらすとされた。ヴェーターラはただ恐ろしいだけでなく、インド説話文学の中では特異なキャラクターを有して描かれた。その典型が十一世紀に成立したとされる『屍鬼二十五話』（上村勝彦訳、東洋文庫、一九七八年）である。『屍鬼二十五話』のサンスクリット語タイトルはヴェーターラ・パンチャヴィンシャティカー（Vetālapañcaviṃśatika）といい、ヴェーターラの二十五話を意味する。この物語集は、死体に憑依したヴェーターラが王に物語を語り、最後に問題を出すと王が正しく答えるという形式を持っている。この形式で二十五の物語と問答が集められている。

細かい文献学的な説明は前出の拙稿に譲るが、インドのこの物語集はチベット語に翻訳され、さらにそこからモンゴル語訳された。しかし、チベット語訳もモンゴル語訳もサンスクリット語の単純な翻訳ではなく、それぞれの土地での創作や改作、アレンジがなされた。ことにモンゴル語版ではインドにもチベットにもない物語が創作され、そこからチベット語訳されたものもある。モンゴル語版では、サイン・アモガラント・ヤブダルト・ハーンと呼ばれるハーン（皇帝）が旅の途中でヴェーターラに憑依された死体と出会うことから始まる。ハーンが死体を袋に入れ、これを担いで行くと死体が中から話しかける。その話の内容が個々の説話となっている。この説話における死体は身の毛もよだつような恐ろしい存在ではなく、主題たる物語を語る狂言回し、もしくはMCのような役割を持っている。また、死体自身は誰でもない。この物語では、ヴェーターラが取り憑いた死体はチベット語で「神通力を持った死体（Rodngos grub can）」、モンゴル語で「呪力を持った死体（Sidiü kegür）」と訳され、物語とともに大きな人気を博した。

ところが原語が同じヴェーターラであるにもかかわらず、『讃』のチベット語訳ではロ・ラン（ro langs）すなわち「起き上がる死体」とされ、モンゴル語訳ではそれを借用したオロラン（orulang）とされた。『屍鬼二十五話』と『讃』との訳文のみを見てサンスクリット語の原文を見ない読者には、両者が同じヴェーターラを指すことはわからない。ただ『讃』の（21.3）のモンゴル語訳では、アダ（ada）、オロラン（orulang）、チュトゥグル（cidkür）と人に害を及ぼす異界の存在としてその名を挙げており、『屍鬼二十五話』中のキャラクターとは異なり、ヴェーターラ本来の姿である恐ろしい鬼の一つ

として現れている。アダはモンゴル語で悪霊、チュトゥグルもモンゴル語で幽霊に近い。オロランのみがチベット語からの借用であり、いずれも災厄をもたらす魔物を指す。サンスクリット語、チベット語でも、これらはみな悪霊に属する。『讃』は、ターラー菩薩がこうした悪霊・悪鬼たちを制圧すると説いている。

そもそもヴェーターラは、人の死に対する恐怖の現れである。死は抽象的で不可思議であるが、その具象化たる死体は可視で感覚的に捉え得る。その死体が動くということは、死の恐怖の具象化でもある。追体験が不可能で不可知の死と、可視化された死体には複雑な恐怖が混在し、それが動くということは人の心を撹乱して恐怖心を煽り立てる。ゾンビにしてもキョンシー（殭屍）にしても、夜な夜な棺から出てくるドラキュラにしても、根底には同様の恐怖心がある。ネアンデルタール人や縄文人の埋葬法である屈葬にも、死体が蘇ることへの恐れが原因と多くの学者は考えている。死や死体への恐れは古く、普遍性を持った感情といってよい。ブッダが説いた生老病の行き着く先が死であり、それは人の意思や努力で制御できない四苦最大のものである。ブッダのように死を涅槃寂静の境地となすことは、凡夫にとっては難しい。ターラーへの信仰は、弥陀信仰同様、死への恐怖を軽減するものとして機能した。それらを勘案すると、『讃』の最後の詩句にヴェーターラからの救いを説いたことには、意味があるのではなかろうか。

さて、従来に増して解説が長くなったが、これまで同様、以下に漢訳や『讃』の諸説を見ておこう。

安藏の漢訳は以下の通りである。「敬禮具三真寶母／善静威力皆具足／藥叉執魅尾怛辣／都哩最極除災禍」。漢訳では三種の悪霊の順序が現存するサンスクリット語原文とは異なっている。安藏訳では最初の「藥叉」はヤクシャ、次の「執魅」はグラハ、三番目に記された「尾怛辣」がヴェーターラで、サンスクリット語のグラハ、ヴェーターラ、ヤクシャとは順不同である。一方、漢訳はチベット語訳と同じ順序となっている。

S系の注釈ではこのターラーは「完全なる成就者ターラー（Tārā Pari-pūraṇa ~ Tārā Pari-pūraṇī / sgRol ma yongs su rdzogs byed ma）」と呼ばれる。その図像は、一面二臂で白色の身体を有し、雄牛の上に坐している。通常の眼とともに額には縦の眼があり、三眼である。かすかに忿怒の相を示し、身体には虎の毛皮の腰巻きをまとっている。

N系の注釈では、サンスクリット語で「光炎のターラー（Tārā-Marīcī）」、チベット語で「光を持つターラー（sgRol ma od zer can ma）」と名付けられている。サンスクリット語マリーチー（marīcī）は光や炎を表す語で、マーリーチーとすると摩利支天という女尊の名称にもなる。摩利支天は古代インドの『リグ・ヴェーダ』神話以来の古い尊格で、仏教に取り入れられ、日本においても楠木正成などによって広く尊崇された。二十一番目のターラーの名称としては「光炎」を意味するもので、別の尊格である摩利支天との関係は未詳である。

以上、『讃』の挙げる二十一ターラーへの讃歎すべてを訳了し、その特質と信仰を述べてきた。次回も引き続きターラー信仰の実態と歴史を見ることにしたい。

民主化後のモンゴル国で出版された『呪力を持った死体』の表紙に描かれたヴェーターラに憑依された死体。ハーンの背に負ぶさっている（Шидэт Хүчирийн Үлгэр, Соёмбо, 1996）

心の免疫力

シャンソン歌手　友納あけみ

秋の雲が広がっています。今年も後二か月…月日は全速力で過ぎていきました。今までも、大きな戦争や災害が地球の何処かで起きたりはしていましたが、こんなに世界中同時に丸ごとが危機に襲われている状況は、多分人間の歴史の中で初めてなのではないでしょうか?それも、目に見えないほど小さなウイルスの為に…

半年以上出口のないトンネルの様な日々をずっと過ごしてきました。でも、光が見えないなら、見えないなりに、身動きが不自由なら不自由なりに、何かを見つけて生きていかなくてはと思われます。

上皇后陛下が、お薬の影響でお手を少し患わせておしまいになり、ピアノが前のように弾かれなくなってしまわれたそうです。でも、そのお言葉で「今まで出来ていたことは、全て恵まれたもの!お返ししたと思えば!」とお話しになっていると…

本当に、つくづくいろいろなものを恵まれていたのだと!コロナに奪われて初めて気がついています。そして今、生きていることを許されていることに深く感謝して、与えられたものの恵みを享受し、出来る限りのことを精一杯やっていきたい!と思っています。

今後もライブは続けていきます。それぞれの場所、会場、時刻と…一番良い状況を捜しながら、創っていきたいと考えています。どの店も注意深く感染対策を、換気をしてくれています。音楽は間違いなく心の免疫力を上げてくれます。

秋雨の中で、今日は久しぶりの青空!鰯雲、爽やかな秋風!生きていることは本当に素晴らしい奇跡なのだと…思う日々です。

日本遺産認定記念

桑都・はちおうじの織物展示

十月十二日より、平日を中心に特別精進料理「もみじ膳」を御案内しております。食材の仕入れによって内容は変更することがありますが、秋の味覚を楽しめる献立となっておりますので、この機会に是非ご賞味ください。

また、お食事会場では、八王子市が「霊気満山高尾山」として日本遺産認定されたことを記念して、八王子の織物を展示中です。戦前は織物の生地(着尺)の産地として、戦後はウール材を用いた「紋ウール」の産地としてとして栄えた「桑の都・織物の街はちおうじ」の美しい織物をご覧ください。

桑都とも称された八王子の織物をご覧頂けます

いけばなの心⑨

華道教授　佐藤　宗明

立冬も間近に迫り、冬の気配を感じることが多くなってきました。今回の作品は池坊に特に伝えられている七夕七種の生花です。通常、池坊の生花は一種から三種の花材を使って生けます。唯一、七夕に限り七種の花材を使って生ける事が許されていた花形が今回の花『七夕七種』です。

生ける形は普通の生花正風体と同様ですが、花材は秋の七草となっています。種類が多く、また、水揚げが悪い花材が多いので手早く見定めて配材し、軽やかに生ける事が肝心になります。七草の内、『朝貌』は現在で言う『朝顔』ではなく、桔梗の事だと言うのが定説となっており、この作品でも桔梗の花を使用しています。

七夕は牽牛・織女へ花を供え、技芸の上達を願う事から、いけばなの発展にもつながったと言われています。現在も池坊最大最古の花展は十一月に行われる『旧七夕会』という花展になります。

五節供に(時期に合わせて)花を飾るという習慣は生活の中で神々を迎え祭る日本人の伝統的な年中行事でした。皆様も是非、季節の花を手にとって頂ければと思います。

花材：萩　尾花　葛　撫子
女郎花　藤袴　朝貌（桔梗）

高尾山の昆虫

カトリヤンマ

133

高尾山に生息するヤンマの仲間はこれまで、名だけヤンマの種も含めオニ、コオニ、ギン、コシボソ、ウチワ、アオ等を取り上げて来ましたが、今回はカトリヤンマの登場です。

本種は細身の中型のヤンマで、成熟すると胸部が緑色、複眼はエメラルド色になり、腰部は青味を帯び長い尾には黒地に青緑色の瑠璃星状の斑紋が入る綺麗な種です。

そして腰の辺りがくびれ、細くなっているのがとても特徴的で、体色は一見クロスジギンヤンマのようであり、体型的にはコシボソヤンマを思わせる、いいとこ取りの種です。見掛けよりも結構生命力があり、十一月くらいまで見られます。

何年か前に高尾の麓でトンボ少年に出会った時、彼は短い網で実に見事な手さばきで次々にヤンマをネット・インしていましたが、やはり夕方の暗くなる頃が一番見かけると言っていました。

カトリヤンマは黄昏飛翔をすることが知られ、漢字で「蚊取綉蜓」となり、蚊を捕食するのが仕事のような感があるヤンマの中で、本種に何故そういう和名が付いたのか興味深いところですが、空中を爽快に飛翔して蚊を捕える名人芸がその称号を与えるに相応しかったのだと感じます。

（文　松島　孝　撮影　上村　雅昭）

高尾山年代記 11

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

七世源智3―北条氏照

永禄四年（一五六一）閏三月、長尾景虎改め上杉政虎（後の上杉謙信、以下謙信とする）率いる越関連合軍は北関東へ兵を引いた。それにしても、前年の暮れ、北条氏康が高尾山薬師堂に対し寺領を寄進したのは何ゆえであったろうか。多摩西部一帯を領有する大石氏に三男氏照が継嗣として入って間もないという事情があったのではないか。高尾山への寺領寄進によって、周辺地域における親北条の機運の醸成を試みたのだろう。

氏照の寺領寄進

その年の三月二日付の発給とされているのが、北条氏照による寺領寄進状である（写真）。

椚田において三千疋、永く寄進申しそうろう、精誠抽きんぜらるべき事肝要そうろう、恐々敬白

三月二日　氏照（花押）

高尾山

この文書には発給年が付されていないが、研究上は永禄四年と解釈されている。ちょうど謙信遠征の最中、太田資正が蠹妨狼藉禁止の制札を発給したわずか二日後である。この大事の時期に寺領寄進とはいかがか、とまずは考えるだろう。この時、氏照は由井城（浄福寺城カ・八王子市下恩方）に籠城していたとされるが、三月六日付で福生郷（福生市）、大久野郷（日の出町）に掲げた制札も同年と推定されている。先の資正の制札について、実際に資正勢が高尾山へ接近していた可能性を述べたが、氏照の支配地域へはあまり干渉せずに小田原へ向け南下した可能性も充分にある。

一方、この書面を読むにつけ、通常の寄進状とは違う雰囲気も感じられる。「精誠抽きんぜらるべき」という文言は、合戦前の督戦状や合戦後の感状を思わせる言い回しである。また、そのことを「肝要そうろう」と強調する点も気になる。「精誠」を尽くすとは、氏照ひいては北条氏に対する態度について言っているものだが、そのことを重要であると念押ししている。謙信・資正の接近に対する対抗措置という見方もできなくはない。

書面にある「三千疋」とは貨幣の額面で、単位を「貫」に直すと三〇貫となる。すなわち、土地から上がる収益のことを指している。位置は「椚田において」とあるのみで、森林か耕地かの内訳も記されないので、すでに高尾山が所有していた土地からの収益を追認して保証するという性格のようだ。後々、徳川幕府から寺領を安堵される際には、石高をめぐる解釈のもつれはあったが、この氏照による寄進が根拠となる。

北条氏照の戦い

さて、八王子の戦国武将としてなじみ深く、高尾山とも縁浅からぬ北条氏照とはいかなる人物であったか。氏照は氏康の三男として生まれた。長子は夭逝、嫡子氏政のすぐ下の弟である。弘治二年（一五五六）銘の座間鈴鹿明神社社殿再興棟札にある「大旦那北条藤菊丸」が彼の幼名と推定されている。氏康は氏照を由井城の大石綱周の娘婿とし、家督を継がせた。氏康は同様に天神山城（埼玉県長瀞町）の藤田氏は氏邦、沼田城（群馬県沼田市）の沼田氏は康元と、一族から継嗣を送り込んでいる。

座間（神奈川県座間市）は元来大石氏領であったので、この頃には何らか大石氏との関わりが生じていたか、翌弘治三年に西多摩に後北条文書が多く発給されているので、この前後が氏照入婿の時期と目されている。そして、永禄四年三月三日付書状の名義に「大石源三氏照」と署名しているので、寺領寄進の時には大石氏当主となっていたことになる。

その年、謙信が北関東に引き上げた後も、青梅の三田綱定は北条氏に敵対した。大石領の北に接する三田領の攻略は氏照に任され、七～九月頃には本拠辛垣城を攻略した。これにより、氏照の居城としてよく知られる滝山城（八王子市丹木町）へ移ったとされる。北方へ展望が開け、多摩川の流れに守られた丘陵上の要害である。永禄七年（一五六四）正月に発生した

第二次国府台合戦（千葉県市川市）では、謙信の策動に呼応して出撃してきた里見義弘と対戦。この戦いで氏照は配下の諸将に感状を多く発給しており、北条方の主力を担ったことがわかる。江戸城代の遠山綱景・富永康景が討死するという乱戦だったが、北条方の逆転勝利となる。

武蔵を回復した北条氏は、次いで古河公方の地盤である下総（千葉県）北部・常陸（茨城県）南西部の利根川流域平定を目指した。古河南方の要衝関宿城には上杉方の簗田氏が踏み留まっていた。永禄二年（一五六八）には関宿城を指呼の間に望む栗橋城（茨城県五霞町）を確保し、氏照が入城する。この頃から氏照は古河公方足利義氏の後見役としての性格を帯びることになる。

さて、古河公方については、久しく言及の機会がなかった。初代成氏の後は政氏が継ぐが、その子高基・義明と確執が生じ、高基の子晴氏と義明もまた相争った。北条氏綱は晴氏の後援者となり娘を娶らせたので、その子義氏は氏照の従兄弟にあたる。晴氏は河越城攻囲戦で氏康に敵対するも敗北して立場を失い、子の藤氏は廃嫡され義氏の擁立となった。永禄三・四年の遠征に際し上杉謙信が藤氏を公方に擁立したが、謙信帰国後に北条方の手に落ち義氏の立場が確定した。

北条氏照による寺領寄進の判物　写真提供：八王子市郷土資料館

滝山城危機一髪

その同じ年、甲斐（山梨県）の武田信玄が駿河（静岡県）の今川領へ侵入を開始した。氏康は娘婿である今川氏真に援軍を差し向けたが、西からは徳川家康も攻勢をかけてきた。戦線は三すくみで膠着、氏真は北条氏の保護下に入り、名門今川氏は没落した。甲相駿同盟が破綻したこの年、織田信長は足利義昭を奉じて京へ上洛を果たしている。

永禄三・四年の遠征以来、上杉謙信とは毎年のように北関東で攻防を繰り返していたが、対武田という共通の利害によって、にわかに越相同盟の機運が生じた。この計略には氏照が関わった。それを察知した武田信玄は、永禄一二年、関東進攻を企てた。九月、碓氷峠を越えて関東へ侵入した武田勢は武蔵西部を南下し、九月末には滝山城へ迫った。同じ頃、西から小仏峠を抜けて小山田信茂の一隊が侵入して来た。現在のJR高尾駅の北西、廿里において氏照の家臣が迎え撃つが敗北。

攻囲された滝山城は落城寸前だったと伝えられるが、信玄は先を急いだ。十月になって小田原城下に攻め入るものの、長きにわたる帯陣は遠征軍には負担が大きい。牽制の目的を達した信玄は、津久井を抜けるルートから退却に移った。氏照らは三増峠にてこれを待ち伏せるが、山岳戦に強い武田勢に突破を許した。

武田氏との緊張関係によって、関東東部の軍勢を大幅に間引いて甲信方面へ配置せざるをえなかったが、元亀二年（一五七一）、北条氏康死去の後、和睦が成立すると、北条氏は再び利根川流域の平定に意欲を燃やした。天正二年（一五七四）閏十一月、二年越しの攻防を経て関宿城は開城。河川交通の結節点である関東計略の要地を確保した。

《参考文献》下山治久『八王子城主・北条氏照』（たましん地域文化財団、一九九四）、黒田基樹『戦国北条五代』（星海社新書、二〇一九）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。十月号掲載の写真二点は、八王子市郷土資料館の提供となります。おわびして補足いたします。

おはなし散歩道

花のかんざし

町田市　大澤桃代

きれいなかんざし……

亜弥は見とれています。それは七五三の髪飾りで、赤や桃色の花がこんもりとついています。

おつかいの帰り、神社の階段から赤い物が転がってきて、足元でピタッと止まりました。亜弥は思わず拾い、持って帰ったのです。階段の上は参道で、深い杉の杜になっています。杉の木から落ちたものでしょうか。

家の花みたい、と亜弥は思います。家は花卉の農家です。七年前に亡くなったお祖父ちゃんが始めたもので、温室やハウスには一年中花でいっぱいです。両親とお祖母ちゃんは温室でしょう、家には亜弥ひとりでした。

もうすぐ七五三、亜弥も七つのお祝いをします。着物は決めましたが、髪飾りはまだです。誰のだろう？　と、亜弥は考えます。友だちでお祝いをすませた子はいません。よく見ると赤い花が少し色褪せていました。

でも、失くした子がいるなら返さなければいけないと思います。

だけど、ちょっとだけ、と亜弥はかんざしを髪に挿しました。

ぴったりです。頭を動かすと銀色の飾りが揺れます。横顔や後姿も見てみます。いろいろポーズを取るうちに、疲れてしまい、亜弥は横になっていつしか眠ってしまいました。

――かんざし、どこ？

どこで失くしたの？

顔をおおって女の子が泣いています。

かんざしがないのです。村のあの神社でした。境内には晴れ着の子どもや家族が見えます。みんな笑っていますが、その子だけが泣いています。参道や裏庭を何度も探し回ったようでした。

両親が、しきりに女の子を慰めています。

「あれだけ探したんだから、あきらめようね」

「帰ってご馳走食べよう」

女の子は、しぶしぶ頷きました。三人は帰りましたが、女の子は何度もふり返っていました。

――せっかく、買ってもらったのに。お父さんに買ってもらったのに。

女の子の悔しさが伝わってきて、夢の中で、亜弥も泣いていました。

そうだ、返さなきゃ！

亜弥は、跳ね起きました。

ちょうどその時、ガラガラと玄関の引き戸が開きました。ママが帰ってきたのです。

亜弥はあわててかんざしを外しましたが、もうその時にはママが部屋に入っていました。

ママがかんざしに目を止め、じっと見ています。

「あ、あの、これ神社の階段で、だから、い、今返しに行くところ……」

亜弥が口ごもると、

「見せてごらん！」

と、ママが怖い目でかんざしに手を伸ばしました。

ガラガラと、また玄関で音がして、お祖母ちゃんが帰ってきました。

「お母さん、これ！」

ママが叫びました。

お祖母ちゃんはママのお母さんで、ママが家と温室を継いだのです。

「わたしのかんざし……あの時、失くした」

お祖母ちゃんは驚いて、眼鏡をかけかんざしを見ています。

「本当だ牧子のだよ。赤と桃色花が三つずつ大きい花が一つ。覚えてるよ」

かんざしはお祖父ちゃんが買ってくれたものでした。家の花みたいだから欲しい、と珍しくママが駄々をこねたそうです。

亜弥は神社の階段のことを話しました。ママが、ふうーっとため息をつきました。

「神様が亜弥のために、牧子のかんざしをあずかっていたみたいだね」

「そうね、お父さんも一緒に守っていたのかしら」

ママが涙ぐんで言いました。亜弥はかんざしをじっと見つめました。(六元)

(挿し絵・小出　茂)

幸せなこと

八王子市　澤田　守正

私が高校二年生の頃に観た映画「野菊の如き君なりき」は、多感なる思いを持って、一度も劇場に足を運んだとの記憶がある。

この映画は「二十四の瞳」の監督として著名な木下恵介監督・脚本で昭和三十年（一九五五）に上映され、原作・伊藤左千夫の小説「野菊の墓」を映像化したものである。

映画のあらすじは、一人の老翁（政夫）が自分の生まれ故郷を訪れ、思春期を回想する純愛小説の映画化で、その老翁を演じたのが、映画「男はつらいよ」で、お寺の御前様を演じていた笠智衆である。その枯れた姿が実に良い。

現在の千葉県松戸市を流れる江戸川にある矢切の小舟の中で、老翁が回想する。

そして折々に挿入される原作者の伊藤左千夫の短歌を、木下恵介の実弟である木下忠司奏でる、美しく、もの悲しいギターとマンドリンをバックに流れた短歌を記してみる。

待つ人も
待たるる人も
限りなき
思い忍ばむ
この秋風に

世にありて
一度逢ひし
君と云えど
我が胸の音に
君は消えず

あぢむらの
騒ぎ罵り
かしましき
世となりにけり
古へ恋しも

燈火の
ほやにうずまく
ねたみ風
ねたむことわり
なきにしもあらず

まかないに
見えて消ゆとも
おのが光
立てて消えなば
悔いはあらめや

世のなかに
光も立てず
星屑の
落ちては消ゆる
あはれ星屑

この映画で圧巻なのが、老翁（政夫）が十六歳の時に、お互いに好きであったが、古い道徳観に縛られて、別れさせられた二歳年上の従姉の民子が亡くなり、民子の墓参りに行き、そこで祖母が事実を語りかけるシーンである。

「民子はな、お前の名前はひとことも言わなんだ。しかし息を引き取って枕を直そうとした時、左の手に紅絹の布に包んだ物をしっかりと握ったまま、その手を胸に乗せていたんじゃ。包んであったのは、お前の手紙とリンドウの花じゃった」と政夫に話し、政夫は慟哭する。

そして次に、文末の句と共に墓に詣でる老翁の姿を遠く見ながらのラストシーンとなるのである。

このラストシーンに、この映画のすべてを見る思いが残った。

主人公の政夫は十六歳、そしてこの映画を観て感動した自分の年齢も、思春期の真っ盛りの同年期であった。

明治の時代と、映画が製作された時代では倫理観や、風俗、習慣、家族制度、男女の機微は大きく違ってはいたのであろうが、人が人を思う気持ちの底辺は、何も変わってはいなかったのである。

今は忘れ去られ、誰も訪れなくなった墓に六十年ぶりに訪れ、ひとり手を合わせ故人を偲び、ご冥福を祈る姿に、そこはかとない悲しみと哀愁を感じるのである。

誰もが心から手を合わせ、その人と出来ることであれば、もう一度会いたい人が居ると思う。

もう逢えなくなった人への思いは、現世で疎遠になって逢えない人との思いとは、大きく違うものがある。

私も一人風呂に入り、逢えなくなった人を思う時、彷彿として込みあがるその人の面影と共に、本当にもう一度逢いたいなあ、と声に出している自分がそこにいる。

今以て逢いたい人がいると言う事は、もう逢いたい人はいないという人より、断然、幸せな事であると切に思うのである。

秋ふけて
野もさびゆけば
み墓辺に
鳴くかこほろぎ
訪ふ人もなく

（伊藤　左千夫　享年四十八歳）

合　掌

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「秋の遊び道具」

八王子市 西山正子 様

高尾山 季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
虹蔵不見
「にじかくれてみえず」
十一月二十二日～十一月二十六日頃

「蔵」とは隠れているという意味です。季節が冬に近づくにつれて曇り空が多くなり、虹が発生しずらくなります。

この時期の虹は出現してもすぐに消えてしまうことから、「冬の虹」は希望や儚さ等の意味を持つ季語です。

今月の風物詩
秋刀魚

サンマは漢字の通り、秋に獲れる刀のような形の魚で、秋の味覚の代表の一つと知られています。

落語の演目にも「目黒のサンマ」があるように、安価で栄養のある魚として、江戸時代以降には食卓に上がることが多くなりました。

近年は漁獲高が減少しており、少し心配です。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

九十四段　好奇心は行動の源泉である

好奇心旺盛な人は、行動的で多くの話題を持ち、他人と上手にコミュニケーションを取り易いでしょう。しかし、「好奇心は猫を殺す」という言葉にもあるように周りが見えなくなり周囲に迷惑を及ぼすこともあるので、注意が必要です。

院内散歩 45

～薬王院の展示物～

版画『若虎』 作・秋山巌

高尾交通安全協会主催

安全祈願祭厳修

於・山麓自動車祈祷殿

大勢の高尾交通安全協会員の方々が参加されて交通安全をお祈りされました

高尾物語 31

東海自然歩道

絵・橋本豊治

長距離自然歩道

東海自然歩道が構想された当時は、高度経済成長の代償として公害問題がありました。憩いの場として自然を再評価し、自然保護に対する理解を深めることを目的として、今では多くの自然歩道があります。

昭和四十二年（一九六七）に、明治百年を記念して、八王子市の高尾山周辺が「明治の森高尾国定公園」に、大阪府箕面市の箕面山周辺が「明治の森箕面国定公園」にそれぞれ指定されました。

昭和四十四年（一九六九）にその二カ所の国定公園を結ぶ**東海自然歩道**が構想されました。その過程で東京都から大阪府までの各自治体で、高原や湿原等の自然地域が国定公園に指定され、古戦場や由緒ある寺社等の文化財を繋ぐ道が整備され長距離自然歩道の第一号として誕生しました。

東海自然歩道は高尾山を起点とし、神奈川県、山梨県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、滋賀県、京都府を横断し、箕面市まで繋ぎ総距離は、1697.2㎞です。

口にしたこと
実行すれば
周りのみんな
ついてくる

「高尾山健康登山の会」役員会

十月十三日(火)

十月十三日、高尾山健康登山の会の役員会が、波多野重雄会長も参加され、薬王院で行われました。本来であれば例年秋に行われる「高尾山健康登山の会親睦会の集い」の際に行われておりましたが、残念ながら本年の親睦会はコロナ禍による感染防止対策の為中止となりました。

役員会では本年の活動報告が行われ、反省会と来年の活動計画として、春の「高尾山清掃デー」、秋の「高尾山健康登山の会親睦会の集い」を実施することについて協議されました。

波多野会長（前列左）と役員の皆様

令和三年　正月期間御護摩修行の流れとお願い

大本山高尾山薬王院の感染防止対策について

【感染防止の基本】
- 大本堂、各部署は常時換気を徹底しています
- 人同士に一定の間隔を確保する為、定員及び間隔制限を実施します
- 境内各所は定期巡回をし、消毒を実施致します
- 消毒液の設置（手指の消毒にご協力をお願いします）

【大本堂内での対策】
- 靴袋をご持参下さい
- 堂内には入れるのは例年の半分の人数とさせて頂きます（内陣参拝は行っております）
- 堂内での私語はお控えください

【坊入りについて】
- 例年、七日まで行っている新年の御挨拶（おとそ膳）を本年は中止と致します

【御護摩受付所・信徒休憩所】
- 御護摩受付所前には臨時の記入場所を設置致します
- 信徒休憩所は使用中止と致します
- 御朱印及び健康登山押印は信徒休憩所に移動致します

※御参拝に際し、検温、マスク着用、消毒等感染予防を行い、体調に留意の上御来山下さい
※御護摩札、縁起物、御守り等は郵送にて授与致します

御信徒の皆様にはご不便をお掛け致しますが、何卒御理解と御協力の程、宜しくお願い申し上げます
御質問等御座いましたら高尾山薬王院信徒部までご連絡をお願い致します

高尾山薬王院信徒部　TEL〇四二-六六一-一一一五

星まつり祈祷のおすすめ

星まつりとは、毎年順を追って巡りくる九星にお祈りして、災厄を除き福運を招くご祈祷です。

高尾山では、**冬至に星まつり特別大護摩供**を厳修して、御信徒各位の諸願成就を祈念しております。

又、当山の星まつりの御札は**飯縄大権現**、**薬師如来**、**不動明王**の三尊を始め、殊に**九星**、**十二宮**、**二十八宿**等の諸々の曜星を網羅した**星曼陀羅**を内符として納めたお札で、御利益は誠に深重であります。

多くの御信徒の皆様にお申込みを賜わり、広大無辺のご加護に浴せられますようお勧め致します。

※年齢は来年の数え年（来年の満年齢に一歳加える）

ご祈祷料はお一人様千円。特別祈祷料は、二千円以上となります。申し込み締め切りは十二月八日、冬至の祈祷終了後、お札を郵送致します。

祈祷申込希望の方はご連絡下さい。申込書や高尾山の寶暦、振込用紙一式をお送りいたします。

※本年より祈祷料を改定させて頂きました。お間違えの無いようお願い申し上げます。

凶運	大吉運	半吉運	大吉運	凶運	凶運	半吉運	半吉運
●	○	◑	○	●	●	◐	◑
羅喉星	木曜星	月曜星	日曜星	火曜星	計都星	金曜星	土曜星
此の星に当る人は運勢滞む象にして諸事慎まざれば災難あり家内他人に口舌事多しなお病難に注意を要す信心堅固にして慎むべし	此の星に当る人は幸運の象にして万事好都合に運ぶなれども細心の注意を欠くと損失あり目上目下の意見を聞き性急を慎むべし	此の星に当る人は万事憂え多き象にして諸事思ふにまかせず至て心労多く損失難別病災などに悩む信仰厚ければ除災光明を得る	此の星に当る人は盛運にして万事順調に運ぶ像なれども慢心すれば大吉反て凶となる信心して加護を得べし	此の星に当る人は疲労困憊の象にして災厄病難等に注意すべし信心して堅忍自重を要す	此の星に当る人は万事憂え多き象にして諸事思ふにまかせず至て心労多く損失難別病災などに悩む信仰厚ければ除災光明を得る	此の星に当る人は運勢険るの象にして黒き雲の為に清き月の光も隠るゝ如く何かと障りあり口舌争論傷害等用心すべし	此の星に当る人は運勢漸く開くの象にして諸事準備なさば花綻ぶがの如くなれど怠らば災害事憂あり
七赤	六白	五黄	四緑	三碧	二黒	一白	九紫	八白	七赤
令和3年生	平成25年生	平成26年生	平成27年生	平成28年生	平成29年生	平成30年生	令和元年生	令和2年生	令和3年生
1	9	8	7	6	5	4	3	2	1
平成24年生	平成16年生	平成17年生	平成18年生	平成19年生	平成20年生	平成21年生	平成22年生	平成23年生	平成24年生
10	18	17	16	15	14	13	12	11	10
平成15年生	平成7年生	平成8年生	平成9年生	平成10年生	平成11年生	平成12年生	平成13年生	平成14年生	平成15年生
19	27	26	25	24	23	22	21	20	19
平成6年生	昭和61年生	昭和62年生	昭和63年生	平成元年生	平成2年生	平成3年生	平成4年生	平成5年生	平成6年生
28	36	35	34	33	32	31	30	29	28
昭和60年生	昭和52年生	昭和53年生	昭和54年生	昭和55年生	昭和56年生	昭和57年生	昭和58年生	昭和59年生	昭和60年生
37	45	44	43	42	41	40	39	38	37
昭和51年生	昭和43年生	昭和44年生	昭和45年生	昭和46年生	昭和47年生	昭和48年生	昭和49年生	昭和50年生	昭和51年生
46	54	53	52	51	50	49	48	47	46
昭和42年生	昭和34年生	昭和35年生	昭和36年生	昭和37年生	昭和38年生	昭和39年生	昭和40年生	昭和41年生	昭和42年生
55	63	62	61	60	59	58	57	56	55
昭和33年生	昭和25年生	昭和26年生	昭和27年生	昭和28年生	昭和29年生	昭和30年生	昭和31年生	昭和32年生	昭和33年生
64	72	71	70	69	68	67	66	65	64
昭和24年生	昭和16年生	昭和17年生	昭和18年生	昭和19年生	昭和20年生	昭和21年生	昭和22年生	昭和23年生	昭和24年生
73	81	80	79	78	77	76	75	74	73
昭和15年生	昭和7年生	昭和8年生	昭和9年生	昭和10年生	昭和11年生	昭和12年生	昭和13年生	昭和14年生	昭和15年生
82	90	89	88	87	86	85	84	83	82
昭和6年生	大正12年生	大正13年生	大正14年生	昭和元年生	昭和2年生	昭和3年生	昭和4年生	昭和5年生	昭和6年生
91	99	98	97	96	95	94	93	92	91
大正11年生	大正3年生	大正4年生	大正5年生	大正6年生	大正7年生	大正8年生	大正9年生	大正10年生	大正11年生
100	108	107	106	105	104	103	102	101	100

お護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には一年間掲示される杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ、共存共栄し、本日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

高尾山のお護摩札とお供物

(大) 10,000円	お護摩 3,000円以上	お護摩 5,000円以上	お護摩 10,000円以上	特別大護摩 30,000円以上	開帳大護摩 50,000円以上	特別開帳大護摩 100,000円以上
(中) 5,000円						
(小) 3,000円						

家内安全(家)　商業繁昌(商)　事業繁栄(事)　交通安全 車内用札(車・交)　交通安全 神棚用木札(木・交)　身上安全(身)　災難消除(災)　厄除(厄)　身体健全(体)　当病平愈(病)　開運(開)　良縁成就(縁)　安産成就(安)　入学成就(入)　心願成就(心)　御礼(礼)　奉納杉苗(杉)

(　)内の略称をお書き下さい

お護摩の願事

お願い事は一体一願意とします。

併願(二願意)は一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

高尾山報助成金志納者
御芳名(順不同・敬称略)

八王子市　高橋　正久
〃　鈴木　長一
船橋市　桑澤　俊義
山武郡　手塚　弘昭
立川市　石田　正一
町田市　坂口　安宏
所沢市　沖田　正太郎
匝瑳市　吉祥院　信雄
羽生市　岡戸　雅一
練馬区　鈴木　圭三
豊島区　高石　千鶴子
相模原市　山崎　正彦
前橋市　清水　洋一
桐生市　和田　富夫
江東区　小川　秀一
香取郡　石橋　英子
稲毛区　齋藤　実
八王子市　金澤　久嘉
横浜市　三宅　ふじ
深谷市　福島　光子
東村山市　龍雄
板橋区　高橋　義晴
八王子市　落合　良二
墨田区　片男波　信治
熊谷市　蜂須　瑛
伊勢原市　塚本　豊司
町田市　宮嵜　栄一
鴻巣市　熊野　キエ子
板橋区　大沼　三恵子
横浜市　森村

青梅市　田村　勝子
八王子市　一般社団法人 高尾保養院
横浜市　岡田　成子
川崎市　齊藤　宣實
江東区　東　覚寺
東久留米市　吉岡　智代
八代市　庄司　和子
板橋区　(有)上信堂
鈴木　一郎
深谷市　狭山市　保次
大里郡　日野岡
深田　節子
多摩市　古谷　浩之
日野市　村田　昭二
太田市　森　山智子
八王子市　守屋　直
行田市　渡辺　宏
港区　中川　兼造
北区　橋本　操
八王子市　倉石　芳和
〃　秋山　重男
中野区　小杉　和義
佐野市　荒居　幸子
浦安市　荒川　清
相模原市　磯部　司郎
〃　小野沢　浩平
町田市　梅原　良郎
深谷市　木島　富士夫
川崎市　谷口　順和
いわき市　新藤　孝弘
八王子市　菱山　愛子
京都市　松本　恭俊

邑楽郡　柳田　稔子
羽生市　上村　昇
市川市　吉田　智恵子
中央区　吉野　早苗
太田市　貴也
品川区　誠規
伊藤　久
八王子市　大神田
鎌倉市　梅澤　庄一
港区　君島　良一
札幌市　武田　雄二
国分寺市　松村　壽子
鹿沼市　荒川　昭巳
豊島区　神山　洋一郎
立川市　熊添　圭子
高知市　坂本　敬子
深谷市　田部井　光男
八王子市　苅部　栄寿
〃　苅部　キクヨ
〃　兒城　勇夫
〃　大山　泰
太田市　上村　和子
渋谷区　大津　正宝
高崎市　織田　早苗
横浜市　佐藤　安久
石岡市　宮内　卓也
前橋市　吉野　政治
〃　佐藤　源韶
八王子市　小澤　爲明
伊勢原市　佐々木　晋介
甲府市　丸山　福栄
狭山市　根岸　由洋
新宿区　大橋　輝子

新座市　高橋　久子
〃　彰山　粧麗
所沢市　青木　永次
〃　青木　和子
〃　丸田　敏美
〃　青木　輝美
熊谷市　菅谷　昌文
川崎市　鹿島　市郎
邑楽郡　木村　典子
真岡市　小暮　周平
朝霞市　(有)和智造園
八王子市　入山　慎哉
〃　多賀谷　勝
〃　米山　輝二
板橋区　三浦　泰
前橋市　佐々木　好二

立川市　堀江　秀夫
鎌ケ谷市　小宮山　通朝
あきる野市　南波　和子
本庄市　田島　英治
八王子市　酒井　ふみ
甲州市　植野　幸子
松戸市　大宮　博
西多摩郡　小沢　ミネ
町田市　中嶋　聡
八王子市　松木　艶子
伊勢崎市　山田　隆
東村山市　安藤　和子
熊谷市　小田川　英之
富里市　森　照森
相模原市　遠藤　恵子
高尾山健康登山者一同

郵送御護摩申し込み受付について

当山では、御護摩修行に参加できない方の為に、御護摩札の郵送をお受けしております。

手紙、FAX等でお申し込みをお願いしておりますが、新型コロナウイルスによる感染症流行の影響により、多くの御信徒の方々から郵送御護摩のお問い合わせを頂いている現状を鑑み、高尾山報本号に同封致しました**郵便振替「払込取扱票」**を利用して、お申込みいただけますよう便宜を取り計らいましたので、宜しくお願いいたします。

尚、元旦御護摩等、お正月以降の御護摩申込をご希望の方は、申込方法が異なりますので、お手数ですがご連絡願います。

登山だより

■十二月行事日程■

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

四日、十六日、二十八日
弁天様御縁日

五日
月例写経会
(十三時山麓不動院)

八日
釈尊成道会(仏舎利塔)

十三日
山内大掃除

十五日
御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)

十八日
おみがき

十九日
納札供養柴燈大護摩供
(十三時祈祷殿広場)

二十日～二十一日
星まつり祈祷会
二十日　午後五時開白
二十一日　午前六時結願

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)

二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

三十一日
大晦日・二年参り

★お知らせ
十二月十三日は「山内大掃除」十八日は「おみがき」の為、午前中の御護摩修行は時間と場所を変更する場合がありますので、御了承下さい。

毎日のお護摩奉修時間

(11月1日～4月14日まで)

午前6時00分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

新春特別開帳大護摩供

元旦御護摩札 申し込み御案内

令和三年元旦、午前零時より高尾山では、元旦特別開帳大護摩供修行が厳修されます。御信徒の皆様には、元旦に参拝されて、大本堂で執り行われるこの修行に参加されることを、お勧めしております。

また、御信徒様各位の都合により高尾山へ御来山頂けない方の為に、元旦御護摩札を郵送でのお取り扱いをいたしております。

元旦御護摩札のお申込みを御希望される方は、高尾山信徒課まで御連絡頂きますと、申込用紙をお送りいたします。同封されている返信用封筒に、元旦御護摩申込用紙を同封頂き、**十二月十日**までに必着するようにご投函頂きますよう、お願い申し上げます。

尚、元旦御護摩札の発送は、**一月三日**以降を予定しております。

■申し込み締め切り
十二月十日必着

■お問い合わせ先
電　話　〇四二-六六一-一一一五
FAX　〇四二-六六四-一一九九
高尾山薬王院・元旦御護摩係まで

工事終了のお知らせ

昨年十月十二日に関東地方を襲った台風十九号により、高尾山上の大杉原において発生した、石垣の崩落による土砂で破壊された、斜面の復旧工事が終了いたしました。

御信徒の皆様方におかれましては、道路の通行規制等に御協力頂きまして感謝申し上げます。

高尾山報助成金 御志納のお願い

当山では、大護摩修行や星祭り等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報を送っております。

引き続いてご愛読されますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号 193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　渋谷秀芳
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円